

CEFR 準拠教科書『DEKIRU』使用下での 異文化間コミュニケーション能力育成のための取り組み

三森 優
ブダペスト日本文化センター（ソフィア大学）

【キーワード】 『DEKIRU』、異文化間コミュニケーション能力の育成

1 『DEKIRU』教科書の理念と内容

現在、ハンガリーでは「日本・ハンガリー協力フォーラム」の下、国際交流基金ブダペスト日本文化センター主導で作成された CEFR 準拠教材『DEKIRU』¹が使用され始めている。教材作成の中心となった佐藤らは、本教材の理念として「日本語教育の目的を、「ことば」の能力に加え、日本語や日本文化の知識能力を駆使し、異文化環境において異なる社会文化的背景を持つ人間が相互に対話を続けていくために必要な意欲と寛容、知識と技能を育成する」と述べており（佐藤・セーカーチ 2009）、異なる文化を持つ人間同士が対話するための能力育成が、本教材を使用するものにとって重要な課題となっている。本稿では、この教科書を用いながら日本語コースを運営する上で、上記のような能力育成のためにはどのような注意が必要であるかを述べる。

『DEKIRU』教材の各課の構成は、まず冒頭に能力記述文があり、さらに「異文化クイズ」、モデルテキスト、文法練習、Can-Do タスク、お持ち帰りタスク、カレイドスコップ、文化コラムとなっている。これらの項目には、異文化間コミュニケーション能力育成のための様々な要素も盛り込まれている。本稿では特に文化面を扱っている項目をどのように授業で扱うかを取り上げる。

2 ブダペスト日本文化センターにおける『DEKIRU』教科書使用実践経緯

国際交流基金ブダペスト日本文化センター日本語講座（以下、日本語講座）では、2010—2011 年度より『DEKIRU』教科書を使用している。使用を開始した 2010—2011 年度は依然教科書作成状態であり、2011 年 9 月の出版までは原稿を試用版として使用し、その授業実践蓄積を図った。2011—2012 年度は 9 月に出版された『DEKIRU 1』を平仮名・片仮名既習の入門クラス、さらに 1 年間『みんなの日本語 初級 I』で学んだクラスと 1 年間『DEKIRU 1』で学んだクラスで使用した。教科書の課は、それぞれ入門は 1 課から、1 年間学んだクラスは 13 課から使用した。これに加え、未だ出版されていなかった『DEKIRU 2』の原稿を試用版として『みんなの日本語 初級 II』修了以上のレベルの初中級クラスで使用した。2012—2013 年度からは、2012 年 9 月に『DEKIRU 2』が出版されたため、晴れて製本された『DEKIRU』の 1、2 の教科書の使用を始めることになった。

『DEKIRU』の教科書は、1 冊目が 24 課まで、2 冊目が 48 課までと、各 24 課全 48 課の構成になっている。日本語講座では、1 年で 12 課ずつ進む進度を設定し、4 年で 2 冊を終える進度となっている。そのため、試用時から数え 2013—2014 年度を終えた段階で初めて、

1冊目と2冊目の全てを使って日本語を学んだ受講生を輩出することになった。

3 異文化間コミュニケーションを意識した授業

「1」で述べたが、教科書では異文化間コミュニケーション能力育成のための様々な要素がちりばめられている。特に各課冒頭にある「異文化クイズ」や各課終わりのカレイドスコープ、4課毎にある文化コラムはまさに「異文化」として日本文化を学ぶことが意識されている。しかしながら、これらの要素を無自覚に授業で用いては、異文化間コミュニケーション能力の育成にはつながらない。

松浦らが述べているように（松浦・宮崎・福島 2012）、この教科書は「知識」、「比較」、「態度」へと、段階的に異文化間コミュニケーション能力が育成できるよう意図されて作成されている。そのため、この教科書を用いながら異文化間コミュニケーションの育成を目指すには、これら三つの要素を意識的に授業で養えるように指導しなければならない。しかし、教科書ではこれらの意図が明示されていないわけではないため、単に教科書を見ただけでは、教師は「知識」を与えることに終始してしまいがちである。

さらに教科書第45課は、佐藤らがこの教科書の独自性を強調した（佐藤・セーカーチ・キシユ 2012）「誤解」という文化の相違による場面の提示、及びその解決方法の検討の課となっている。単に日本の文化的な「知識」だけを与えられているだけでは、この第45課を有効に学び得ない。そのため、JFBP 日本語講座では1冊目の段階から、日本文化のみならず自分化を相対的に内省できるよう、教科書の各要素を扱う際には可能な限り学習者に日本文化とハンガリー文化の類似点と相違点を学習者に意識化させ、そこから自文化を振り返るよう授業を進めた。

日本語講座ではポートフォリオも利用した。ポートフォリオには、上記の指導とともに「どのようなことに気づいたか」、「どう思ったか」等の点を学習者に書き込ませた。これらを各テスト時に振り返り、クラスで話し合う時間を設けた。これにより、自他文化を意識化させ、単なる知識にとどまらないようなコース運営を行った。

注.

¹ 『DEKIRU』教科書は日本語で『できる』とも表記されているが（1冊目、2冊目とも）、本稿ではローマ字表記を採用した。

<参考文献>

- 佐藤紀子・セーカーチ=アンナ(2009)「CEFR に基づく日本語教科書とは？—対話に基づく異文化間コミュニケーション能力を養う日本語教育を目指して—」『第13回ヨーロッパ日本語教育シンポジウム報告・発表論文集』, pp.211-218, ヨーロッパ日本語教師会.
- 佐藤紀子・セーカーチ=アンナ・キシユ=シャンドルネー (2012) 「日本語教科書『できる1・2』—その通時的・共時的位置—」, 『日本・ハンガリー協力フォーラム日本語教育シンポジウム「日本・ハンガリー協力フォーラム事業の総括とハンガリーの日本語教育のこれから」実施報告書』, pp.81-98, 国際交流基金ブダベスト日本文化センター.
- 松浦依子・宮崎玲子・福島青史 (2012) 「異文化間コミュニケーション能力のための教育とその教材化について—ハンガリーの日本語教育教科書『できる』作成を例として—」, 『日本語教育紀要』第8号, pp.87-101, 国際交流基金.